19 世紀前半のロシアが目指した新疆貿易
――シベリア発、「インドへの道」の再燃――

中村　朋美

1727 年以来、ロシア帝国と清朝間の基本となったキャフタ条約体制に対して、18 世紀末よりロシア帝国は露清間にキャフタ以外の新たな貿易経路を開くことを求め始め、1851 年には清朝とイリ通商条約を締結した。そこに至るまでの新疆における露清貿易（新疆貿易）の状況やその独特の貿易構造については、すでに先行研究がある程度明らかにしている。しかし、ロシアによる貿易地の選択・移転が意味するものには、これまでの研究は注意を払ってこなかった。そもそも 19 世紀初頭にロシアが貿易地の候補地としてまず注目したのは、イルティシュ川上流域、なかでも同地域の露清国境地帯付近、アルタイ山中にあった小さな村落（要塞）に過ぎなかったブフタルマという地であったが、半世紀後の 19 世紀半ばには、ロシアの貿易拠点は辺境とはいえ清朝領内の西側国境近くの中心都市クルジャ（イリ）、チュグチャク（タルバガタイ）に構築されるに至ったのである。なぜこれらの地が貿易の拠点に選ばれたのかという問題は、ロシアのアジア政策を明らかにするうえで説明をつけておく必要がある。この問題を考えるうえで、報告者は、特に 17 世紀半ばから 18 世紀初頭にかけてロシア政府が強く希求した、いわゆる「インドへの道」が 19 世紀前半においても重要な意味を持ったのではないかと考え、本報告ではこの観点と絡めて、中国西側国境地域においてロシアが貿易拠点を設定した目的、及びロシアが設置を目論んだ貿易拠点の機能の変化について検討することを目的とした。

まず 16 世紀半ばよりロシア政府がインドとの直接交易の確立を目指して行った政策、もしくは構想であった「インドへの道」について、17 世紀中期からピョートル 1 世期に見られた積極的政策と 1730 年代以降のその変化について特徴を整理し、その歴史を概観した。

概して「インドへの道」が取り上げられるのは 18 世紀前半までであるが、本発表では 19 世紀前半に新疆貿易に関連してこの構想がどのように取り上げられ、どのような意味を持つと考えられていたのかについて検討した。すなわち、1810 年代前後では、当時のシベリア要塞線司令官 Г.И. グラゼナプがシベリア要塞線上の町から新疆南西部、中央アジア、

さらにその先にあるカシミール、チベットなどの地域との交易関係を構築しようとキャラバンを派遣するなど、幾多の政策を打ち出したことを取り上げ、その目的が「インドへの道」をシベリア、特にシベリア要塞線付近の地域の経済的発展と結びつけることにあったことを明らかにした。ついで 1820 ～ 30 年代にロシア政府が貿易地の問題についてどのような認識や問題意識を持っていたのかについて、北京伝道団団長と伝道団の交代時に派遣された監督官に与えられた訓令と彼らの報告をもとに整理を行った。そして、ロシアが 19 世紀初頭当時、ブフタルマに注目した理由は、この地がキャフタと同様に露清両国の商人が直接取引する場として機能しうると考えられたこととともに、その後背地に新疆のみならず、インド、カシミール、チベットなどの地域が広がっていたことが重要であったことを指摘した。そのうえで、その後、ブフタルマを貿易地とする目論見が破綻し、ブフタルマに代わる貿易地、もしくは中継地としてセミパラチンスクの比重が高まったこと、同時にロシア当局はブフタルマより先の地域で密貿易（非公式の貿易）が行われている事実に着目するようになり、1840 年代初めにはクルジャとチュグチャクに貿易代理人を設置するという意見が出ていたことを述べた。その後、新疆貿易の今後の展望を調査するため、1845 年にセミパラチンスク経由で新疆に派遣された外務省員 Н.И. リュビーモフは、新疆内の商業・物流状況を観察して、クルジャとチュグチャクを新疆内と中国内地へロシア商品を流通させる起点として重視した報告をしており、あわせてセミパラチンスクからチュグチャク、クルジャ、カシュガルへキャラバンを送って直接貿易関係を結び、さらに中央アジア商人の交易活動とも絡める構想をも提示したことを報告した。

本報告をまとめると以下の通りである。ロシア政府とシベリア当局は「インドへの道」を新疆貿易と結びつけ、新疆貿易を中国内地とだけではなく、チベット、カシミール、インド、中央アジアとも結びつく商業圏を形成する可能性を秘めたものとして考えるようになった。この構想の進展にともない、19 世紀前半のあいだ、ロシアが想定した貿易地は移転し、前線となる貿易地に期待した機能自体も変化したと言えるだろう。

（関西大学東西学術研究所非常勤研究員）